

---

# 全てを忘れた黒ウサギ

マコト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

全てを忘れた黒ウサギ

### 【Nコード】

N5684T

### 【作者名】

マトト

### 【あらすじ】

死んでしまった一人の少年がいつ天の黒兎とか色々身に宿してネギま！？に乱入する話。思いつきりチート物です。もうひとつの作品もかけもちなんで、更新は遅れる……………かも？

## プロローグ(前書き)

どうも。マコトです。最近いつ天読んでたらはまったので、勢いで書いた作品です。間違いなど、こつして欲しい！という意見があったら、どんどん書いてください！！

## プロローグ

死んだwww

今までテレビの交通事故の報道とか殺人事件の報道とか見ても、別に「へえ〜そうなのか」くらいにしかな聞いてなかったけど、まさか俺の居た本屋にトラックが突っ込んでくるとは思わなかったな〜

で、そんなことはさて置き……………

「ここはどこだ……………!……………」

白

その場所を一言で言い表すならその言葉が一番相応しいであろう  
それぐらい真っ白  
周りを見ても、何も無い  
もう、何がなんだか分からず途方にくれながら、とりあえず叫んで  
いる

『ひるさいに!…!』

何故、名古屋弁?

一応声のしたほうを向いてみる  
そこには一匹の子猫：いや、子猫よりも小さいかもしれないような、  
綺麗な黒い毛並み猫が居る

それには見覚えがあつた

恐る恐る自分の手元を見る

そこには、俺が書店で買った一冊の本がある

それは、何故かこの場所で目が覚めたときに持っていた唯一の所持  
品でもある

実は暇だった俺は最初の方はそれを読んでいた

で、読み終わってしまったので、今のような状況にいたっている  
そして、もう一度前の猫を見据え……………

「ニヤン吉？」

『誰に対して言ってるに！！』

もっと口の利き方に気をつけるに！！』

気をつけるな！っていつてるのか気をつける！って言ってるのかわ  
からん

『仮にも神であるわしに向かつてに』

ん？今コイツなんて言った？

「え〜と今神って言いました？」

『そつだに』

わしは神だに』

「で、何故神様はそんなお姿に？」

『お前の中のイメージを借りてみたのに』

「チヨイスがニヤン吉って……………」

『わしの趣味にケチつける気かに』

「いや、そついうわけじゃ……………」

『じゃあコイツにするに……………』

ふん。雑魚は黙って俺の言うことを聞いておけ』

「月k『黙れ雑魚』……………」

これは前以上にやりづらい

『今回は俺の奴隷どもが間違って貴様を殺してしまったらしくてな  
まあ、面倒だが何処かの世界に転生という形で生き返ってもらう  
ことになった』

え

俺、ミスで殺されたの？

「おい、お前r『黙れ雑魚』……………」

くそ！何も言えねえ

『それで転生先だが………』

この状況ならやっぱり転生先は………

「いつ天で!!」

『黙れ。お前の意見など端から聞いていない  
転生先は「魔法先生ネギマ!？」だ  
異論は一切認めん』

なんて野郎だ………

『これで話は終わりだ  
さっさと行け』

「ちよっ! 転生の特典は!？」

あの世界で何の能力もなしとか確実にもう一回ここに戻ってくる  
とになるだろ!!

『ふむ。それを忘れていた何が良い?』

「あ、それは選んで良いんだ」

『さっさと言わんと、何もやらんぞ』

「言います言います! え〜とまず俺の中に黒兎をニヤン吉の補助無  
しで自由に発動出来るようにして、入れるのと、15分に七回の不  
死の能力、あと凶剣スヘル・エラー、エントリオ兄弟の封印と破壊の能力、こっち

も暴走はしないようにして、『イーズ』と『スカールズ』も、んで最後にミライと契約させてください!!」

『多くて面倒だ』

「いやいやいや、あんた神だろうが!!それくらい別に良いだろ!!」

そういつた瞬間、俺は地面に組み伏せられ、首元に凶剣スベル・エラーが押し付けられていた

『誰に向かってそんな口の利き方をしている?』

「すみませんすみません」

『まあ良い。もう言われた物は全てお前の中に移し終えた後はこれだったな』

そう言つて、俺に凶剣スベル・エラーを投げ渡してくる俺はそれをキャッチして、月光が着けていたように、腰につける

「で、ミライは?」

『先に送った

契約したけりや。向こうでしろ

顔は適当に変更しておいた。今のままでは不憫だったのぞな』

「ほつとけよ!!」

特に不細工だったわけではない……とは思うがさすがにこれは効

くな

『これで本当に終わりだ

さっさと行って来い。雑魚が』

ほんと、この人何様のつもりなんだ？

『俺は神だ』

「心読めんのかよ!!」

『それぐらい余裕だ

なんたって、俺は神だからな』

「今更過ぎる……………」

俺が項垂れていると、急に地面に黒い穴が開く

「え！俺まだ心の準備が……………」

『落ちろ。雑魚が』

そのまま俺の意識は暗い闇の中へと沈んだ

1話 黒ウサギと雷娘（前書き）

一気に2話投稿!!

## 1話 黒ウサギと雷娘

意識が急速に浮上する

重いまぶたを押し開けると、まず見えたのはおっとりとした金色の瞳と同じ色をした髪の毛だった

「あ、おきた？」

「あ、うん……………」

え〜と、俺どうなったんだっけ？

神様が月光で……………ってそうだ！俺死んだんだ！  
ということは、この前にいる少女は

「君がアンドウのミライ？」

「そうだよ！」

インドラのアンドウの末裔

雷の眷属の王

ミライ

いつ天では月光と契約していた。自称、大悪魔。まあ実際にミライの母親のスクラルドは魔界でも最強の部類の悪魔だ  
そして、雷の扱いに関してだけ言えば、このミライはこの世界では最強だろう

だからこそ、この世界に居るであろう赤毛のバカ相手には有効だろう  
アイツは基本雷しか使えないし

「で、早速君と契約したいわけなんだが……………」



ってそうじゃなくて！この本一冊で行けるわけ無いって言うてるでしょー！」

「でも、他には何も持ってないし」

「命は？」

「七回までなら死ぬるから大丈夫」

親指をぐつと立てて、ミライに向ける

「け、契約って結構ルール厳しいんだよ！貴方が本当に……ってそういうええ名前は？」

「名前？お！そつだ。俺の名前って言うのはどう？」

「へ？名前？」

「そつそつ。元の世界での俺の名前  
記憶でも良いけど、そうになると、黒兎の力、間違つて暴走させち  
やったりしそつで……」

「それなら、一緒に家族や友達との思い出の記憶も消えると思つ」

「……そつか

「じゃあそれで良いや。やってくれ！」

「……本当に良いの？お母さんの記憶とか友達とかそんなのも全部消えちゃうんだよ？」

さつきとは明らかに違う怯えたような表情でこちらを見つめてくる

「……………うん。もう二度と会えないだろうし」

それを引きずっちゃったりしたら、困るかもしれないしね」

「本当に良いんだね？」

「ああ」

「じゃ、じゃあ行くね」

この子は優しいな。ぼんやりしながらそんなことを考えていた悪魔との契約は本当に大事な物を差し出さなければ悪魔自身が死んでしまう

そんな中で、この子は自分の心配より、俺の心配をしてくれた本当に優しいな

彼女は目を閉じる。すると、彼女の全身がなにやら、青黒く光ってそれが手を通して、こちらに移ってくる

そして、その光が俺の中を探るように、全身を駆け巡る。それからまた、光がミライのほうへと戻って行く。俺の左手からミライの右手へ。それから腕、肩、首を通って、左胸の心臓のあるところへと戻っていく。そんな中俺の中の何かが消えていくのが確かに分かった。知らず知らずのうちに目から涙が零れ落ちていく。そして、心臓の辺りにあった光が消える

「……………大丈夫？」

「ああ。大丈夫だ」

目の涙を拭って、微笑みかける

「良かった」

で、そういえばさ何で私と契約したって言ったの？」

「さあな、思い出と一緒に消えちゃったよ」

最終的に残ったのは、俺の力についてのことと、ここに至った経緯、それに何故か『ネギま!』と『いつ天』の原作知識だけだ  
そしてそのなかで、一つ気になったことがあった

「力の封印どうしよう?」

「へ?ふついん?」

「そ。今のままじゃ魔力感知されて、追い回されるかもだし、封印の知識もあるから、どうする?」

「ん~~~~~追い掛け回されるのはやだな」

「じゃあ一応力、封印しとく?解放するときは言ってくれれば出来るし」

「じゃあ封印して!」

「了解」

俺は腰から凶剣を取り出す

スヘル・エラー

「へ?何でそれ抜くの?」



俺はその言葉をあっさり無視  
呪いの続きを行う

「トリス、エルミレ」

そして、この呪いの最終段階へと移るために彼女の手を取る  
そして、そのまま自分の唇へと近づけていき……

「ちょ！ええっ！！な、何でいきなりキス！？そ、そんなのまだ早  
っ……………」

そこで、ミライの言葉が止まる  
キスしたことにより、呪いが発動し、ミライが苦しそうな呻き声を  
上げる

そして、今まで金色だった髪の毛と瞳が、茶色と黒に戻り始める  
そして、ぐったりとした表情でこちらを見る

「な、何したの？」

「あ、ごめん。ミライの力を呪わせてもらった

今は通常の三割の力に抑えてある

全力を出したときは俺の許可を得て、キスしなきゃ呪いは解け  
ない」

「な、な、な、何でキス！？」

「突っ込むとこそこ？」

「いや、普通そうでしょ！！ていうか何でキスなの！？」

「だって剣の能力がそうだったんだから、仕方ないでしょ」

「仕方なくなあああああああああ！私まだ十四歳だよ！？まだ全然キスとかしたことないんだよ？なのに、キスしないと力使えないって……………」

「ん？そういうもんなの？この世界の人はすごい普通にキスしてたから、普通なのかな？って思ってたんだけど」

そう、俺には辞書的な意味と二つの物語の記憶しかない

なので、俺の記憶の中のもう一つの情報である『ネギま！？』では女の子と普通にキスしてたから  
きつとキスって普通のことなんだと思っただけど……………

「絶対普通じゃな……………い……………！！！」

そこから、俺は正座させられ自分より明らかに小さい女の子に『キスとは何たるか』ということを教え込まれた

「……………ということなんだよ。分かった？」

「うん。キスするのは好きな人とするものなんだよね？」

「……………」

「じゃあ俺はミライのことが好きなのかな？」

「っな……………／／／／／」

「どうしたの？そんなに顔、真っ赤にして？」

「いや、ね？私たちまだあってそんなに経ってないし、告白するに  
はちょっと……………」

「何言ってるの？大丈夫？」

「う……………馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿！！」

俺のおなかを普通の人間なら一発でノックダウンしそうな力で殴っ  
てくる

まあ残念ながら俺は普通ではないので、大して痛くは無いのだが

すると、俺を殴っていたミライが急に顔を上げて、俺を見つめてくる

「そっいえば、名前どうするの？」

「ああ、そうだった

ん……………じゃあてつげんくわく鉄月光で」

「ふーん」

「記憶の中の人物の名前組み合わせただけなんだけど、駄目かな？」

「全然。それじゃあゲッコー。これからどうするの？」



## 2話 真祖と黒ウサギ（前書き）

題名が真祖で判る様にエヴァ初登場です。けどエヴァほとんど登場  
しません・・・

## 2話 真祖と黒ウサギ

「貴様らは何だ？」

唐突に俺たちにそう問いかけてきた方向を見やる

そこには、まるで人とは思えないほどに美しい少女が人形とともに佇んでいる

いや、まず彼女は人間じゃない

エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル

略してエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

通称エヴァ

俺の中の『ネギま！？』の原作知識の中に出てきている

ダーク・エヴァンジェル

「闇の福音」、

ドール・マスター

「人形使い」、

マガ・ノスフェラトゥ

「不死の魔法使い」、

あしきおとずれ

「悪しき音信」

、「禍音の使徒」、わらへすがたのやみのまおう「童姿の闇の魔王」

自称悪の魔法使い

そして、真祖の吸血鬼で、元人間

と、解説はここまでにして何故こうなったのかというと、それは十分ほど前に巻き戻る

「お腹減った……………」

ここ一時間で、もう二十回は言ってるだろっ言葉を隣にいる少女……………ミライが吐く

「俺もd……………」

俺もだって、と言おうとしたとき、俺たちの周りが囲まれていることに気づいた

「ミライ、気づかなかったの？」

「へ？何g…って囲まれてんじゃん！私たち！」

「今気づいたのかよ……………」

「う……………だってお腹減ってたんだもん」

俺たちが気づいたことが分かったのか周りを囲んでいた奴らが口々に何か咳き始める

「ミライ。こいつら魔法使いだ」

「へ〜」

「へ〜じゃなくて、ミライ倒してきてくれよ〜」

「お腹減ったから無理」

多分こうなったら、ミライはここで動かないだろう  
原作の月光みたいに言えば、従ってくれるかもしれないが、俺にそんな趣味は無い……………多分

「ま、それに能力の確認もしたかったしな」

その瞬間辺りから一斉に魔法の矢が飛んでくる  
それも十や二十とかではすまない  
そして、俺はそれに向かって拳を向け一言

「壊れる」

すると、俺の拳の周りがぐにやりと歪んだように見える  
そして、その歪みに魔法の矢が当たったと同時に消えてなくなる

『！！』

困んでいた連中の息を呑む声が聞こえる  
普通の人間なら見逃すぐらいの小さな音だが、残念ながら俺はもはや人間というカテゴリーに属さないいや、属せないような化物だ  
神様でさえ、殺せるほどの力  
そんなもの相手に人間ごときが十や二十集まったところで、勝てるわけが無かった

困んでいた連中は消されたことに驚きつつも、また新たな魔法の詠唱を始める  
だが

「遅い」

それだけの時間があれば、周りの人間を一掃することなど俺にとっ  
てはわけなかった  
早速一番近くにいた奴に近づくと  
俺の顔を見たそいつの顔が恐怖に歪む

「壊れ……」

そのまま右手をそいつの顔に押し付けるように突き出す  
が、その手を隣から掴む奴が居た

「ゲッコー!!」

ミライだ

その隙に目の前に居たそいつは慌てて逃げ出す

そして、また詠唱が完了したのである

今度は先ほどよりも更に多くの魔法の矢が飛んでくる

右手で消そうかと思っただが、その手はミライが掴んでいるので、仕方なく左手で腰に差している鞘からエペにも似た刀を抜き言い放つ

「被え、スベル・エラー凶剣」

刀の真の名を唱えた瞬間、刀身が血の色に染まり、飛んできた魔法の矢が消えてなくなる

『!?!』

再度全員が息を呑む音がはっきりと聞こえてくる

「なあ、ミライ手を「ゲッコー」ん？」

「キスして!」

「へ?」



逃げていく

そいつらが、完全に逃げてしまったのを確認した後、改めてミライの方を向いて

「何で俺を止めたの？」

「へ？」

「俺があつ男を殺そうとしたとき、何で止めたの？」

「……………死ぬのは怖いんだよ」

「そうなの？」

「ゲッコーは殺されても死なないから、でも人間は違つんだよねえ、ゲッコー」

「何？」

「ゲッコーはその……………あの……………あ、アタシのことどう思ってるの？／／／」

「ミライのこと？もちろん好きだよ。というか俺はミライ以外の人を知らないし

って、ミライは人じゃなかったね」

「じゃ、じゃあさ、じゃあさ、私と二度と会えないってなつたら、どう思つ？」

「そんなの、分かんないよ。でも、そうだな。もし、そうなつたら

きつと寂しいな」

「アタシもゲッコーと二度と会えないってなったらきつと寂しい、と思う」

で、でね死ぬってことはアタシとはもう二度と会えないってことなんだよ」

「うーん、それは理解できるよ」

でも、それとこれに何の関係が？」

「人間だってゲッコーや私と同じ、大切な人がいて、やっぱりその人に二度と会えないってなったら寂しいんだよ」

そ、それでね！あ、アタシゲッコーにそんな人に悲しみを与えるような人にはなつて欲しくない」

最初は死に対する恐怖がなかった俺にも。すぐに理解できた。死ぬのは怖い

誰だって怖い。だから、他の人も殺したくない

それは子供の理論だ。そんなことは頭ですぐに理解できた

誰も殺したくない。言うのは簡単。唯、これからおそらく原作に介入するにあたって、殺さなきゃ殺されるといふ場面があるかもしれない

だから、それは無理だつてはつきり言おうと思った  
だけど

「ゲッコーなら出来るよ！ゲッコーと私の力があれば、きつと……」

ああ。多分この子はそんな状況になつても、俺を止めるだろう

だけど、彼女の言う通りでもあった

俺の力は何の為にあるんだ？人を殺すため？違う！

この子や他のいろんな人を守るためだ！もしかしたら、記憶があったときの俺は違ったかもしれない

たとえ、そうだとしてもそれは昔の俺であって今の俺じゃない

誰かが言っていた『力には責任が付きまとう』

責任。この大きな力

これで、ミライもみんなも守ってみせる

壊すのではなく、守るんだ！

だから、応えた

「ああ。そうだな俺たちなら出来る

いや、やってみせる」

「うん！」

ミライの嬉しそうな表情を見て、俺の選択は間違っていなかったんだって判った

そして、その時

「貴様らは、何だ？」

振り向いた視線の先に映るのは今のミライと同じ綺麗な金髪の長い髪をした少女と小さな刃物を持った人形

そして、物語は冒頭の部分へと帰る

これが黒ウサギと真祖の吸血鬼の邂逅

物語の開始の合図となるのだった

## キャラ設定（前書き）

今まで出てきた（と言っても二人ですが）の能力などの詳細設定で  
す

## キャラ設定

NAME：鉄 月光

転生者。見た目は月光の顔と大兎を足して二で割った感じ。髪の毛は黒。過去の思い出と引き換えにミライと契約。原作と自分の力についての知識ぐらいいしか残っていない。そのため、一見してみると感情が無いようにも見えるが、きちんとある。しかし、デリカシーと言った物がほとんど無いに等しいので、その点はミライがカバーしている時がある（ほとんどないといって良い）

鉄 月光と言う名前は頭の中の原作知識から適当にくっつけた物で、特にこだわりは無い

今のところ、ミライのことは大切に思っている

能力；基本的にいつ天生徒会メンバー（サイトヒメア、碧水泉、黒守・フィリエル・優一以外）の能力及び武器

### 詳細

15分に七回；特にこれと言った名称は無い。いつ主人公 『鉄大兎』 の能力十五分に七回殺されない限り死なない。その間受けた傷は全て元に戻る。15分経過すればこの能力はまたリセットされる。ちなみにその間服がぼろぼろになっても、全て戻るという便利機能付き

黒兎；上に同じくいつ主人公の能力。天魔 をいじって、月の外側の神 とをグジュグジュに混ぜて出来た力。使うと能力の影響で左目が真っ黒に染まり、頭から本物のウサギのように右から薄桃色ベンドイと左から真っ白の刃が生え、それで攻撃も可能。それに加え身

体能力や他も急激に上昇（ラカン一撃死くらい？）。『黒』（黒い）という魔術を使い、ありとあらゆる物を拒絶し、掻き消す。力加減によっては一つの世界を滅ぼすことも可能。他に発する言葉に呪いを乗せ、相手を自殺に追い込んだりする。

スベル・エラ  
凶剣；いつ天では『紅 月光』の武器。ありとあらゆる魔を祓う能力を持った、フェンシングのエペに似た形の刀。相手の力が大きすぎる場合、もしくは天使（ここでは一般的な天使ではなく、天魔の使いの略のこと）相手には効かない。他にも応用で相手を呪ったり、衝撃を消すなど、使い方は色々

破壊；原作ではエントリオ兄弟ハスガ・エントリオの能力。特にこれと言った名称は無い。全てを破壊する能力。原作とは違い、暴走はせず、発動時に角は生えない

封印；原作ではエントリオ兄弟セルジュ・エントリオの能力。上に同じくこれと言った名称は無い。全てを封じる能力。こちらも同じく発動時に角は生えない

イーズ；真つ暗な場所でも昼間のように明るく見える魔法。ニャン吉の補助は無し

スカールズ；魔法を呪う魔法。こちらもニャン吉の補助無し

追記；黒兎は強力すぎるので、使うと言っても、身体能力強化程度。主に使うのは後の三つになる

力関係



## キャラ設定（後書き）

そういえば、凶剣スベルエーラーは良く考えると、『黒』ひっくろを打ち消していましたW  
Ww。すいません

### 3話 はげものとばげもの(前書き)

今回はそこまでの進展はないかと

### 3話 ばけものとばけもの

ゾクッ

そいつを見たのは、それが最初だった

ムンドゥス・マギクス

自分で言うのもなんだが、自分は魔法世界の最強種のひとつ、吸血

イライトウォーカー

鬼の真祖、あのヘラス帝国の帝都守護聖獣の一体。全長100mを

超える巨大な龍である。龍樹ナガシヤと同等のばけものだ

なのに、それなのに……

「(……………私があいつを怖れている?)」

あり得ないことだった。元人間とはいえ最強の化物である自分が人間人間ごときに恐怖することなど

「(まさか、奴も私と同じ……………)」

ハイ・テイライトウォーカー

一つの可能性として、奴も自分と同じ真祖の吸血鬼吸血鬼と言う可能性も考えた。が

「(いや、あれはもつと別の……………)」

もつと得体の知れないナニカだ」

自分もばけものだからなのか、敏感にそのナニカナニカを感じ取れたしかし、愚かな人間どもは、そうとは知らず、奴に襲い掛かる結果は一瞬で決まった

人間どもの攻撃は、奴に当たることすらせず、消えてなくなった人間が新しい呪文の詠唱をし始めるが、奴は近くの男に近づき、呪文を消し去った右手を突きつけようとす

だが、その男が消えることは無かった

「（何だ？あの女は？）」

年齢は十三、四歳と言った少女が彼の手を掴んで止めて、なにやらしきりに叫んでいる

その間も奴は空いた左腕を使って、どうやって切っているのか大いに不思議だが、刀で魔法の矢を切っている

そして、話を聞き終わった奴は頷き、彼女の手を取り、自分の口に近づけていく

そして、手の甲に唇が触れた瞬間

「なっ………！（あの女何所にこんな力を！？いや、もしくは奴が与えたのか？）」

そして、周りの男達が全員逃げてしまった頃合を見計らって、出ようとする

が、それを隣に居た小さな人形：チャチャゼロが制する

「オイ、ゴ主人サスガニアイツハ、ヤバスギルゼ」

「どうせ、気づかれています

今更、逃げても無駄だろう」

制止の声を振り切り、おもいきって奴の前に姿を見せ、問いかける

「貴様らは何だ？」

と

「貴様らは何だ？」

「ん？ミライはミライだよ？ていうか誰？」

「ミライ多分そういうこと聞きたいんじゃないと思うけど」

「え！そうなの！？」

「いや、そんなに驚かれても

で、一体俺らになんの用ですか？ダーク・エヴァンジェル『闇の福音』？」

「一応居ること事態について気づいていたことは気づいていた  
困まれたことに気づいたとき念のために、もっと入念に気配を察知  
してみたのだ

いきなり、原作キャラにあったのには驚いたが

「私のことを知っているのか？」

「ええ。有名でしょ？」

すると、ミライが俺の服の袖を引っ張ってくる

「ねえねえゲッコー。だーくえぶあんじえるって何？」

「それはね、ミライやあそこに居るエヴァンジェリンちゃんみたいな可愛い子のこと言うんだよ」

「へえ〜、じゃあ私もそのだーくえぶあんじえるなの？」

「そうだ」ちよつと待てい！」「どうしたの？」

「私は悪の魔法使い！」ダークエヴァンジェル『闇の福音』はその私の二つ名だ！！それと、ちゃん付けは止める！！」

しかし、その言葉に対してもミライが俺の服の袖を掴んで聞いてくる

「ゲッコー二つ名」貴様は黙れ！」「えー」

「えーではない！まあいい。話を戻す  
貴様ら、いや貴様は何だ？」

「酷いじゃないか。人を物みたいに言うなんて」

「ふん。貴様も私と同じ化物だろう？」

「はは。上手いこと言うね」

「では、さっさと」「その前に」「何だ？」「

隣のミライをチラッと見る

おそろく、もう耐えられそうに無いみたいな顔をしている  
なので

「」「飯食べさせてもらっても良いかな？」「

「ごめんね。ご飯貰っちゃって」

「それぐらいどつってことは無い  
それより……………」

「ああ、俺たちのことだよね  
君の思ってる通り、確かに俺はばけものだ  
ちなみに、ミライは俺と契約した悪魔だよ」

「アイツがか……………!?!」

エヴァがどこか憐れな物を見るかのように、ミライの方を見る  
そこには、もう14になるというのに、顔の周りにご飯粒をつけま  
くっているミライが居る

「ん？エヴァちゃん、どうかしたの？」

「いや、なんでもない」

そして、もう一度こちらを見直す

「おい、あれが本当に……………」

エヴァの言葉はそこで止まる。というより俺が首元に凶剣スベル・エラーを突きつ  
けているので、喋れないというほうが正しい

「俺のことは別に何と言われても良いけど、ミライをそんな物みた  
いな言い方しないでくれるかな？」

「……………分かった」

で、次はお前だ。貴様は一体……………」

「うん。ばけものっていうのは俺にも分かるけど、どういった物かって言われると、解答に困るな

っていうか、俺が何なのか聞いてどうするの？」

天魔 をいじって 月の外側の神 をグジュグジュに混ぜて出来た物って言うても分からないだろうし

「それは……………何も」

「なら、良いじゃん

俺は君と同じばけもの。それでさ」

エヴァはそれでも納得していないようだ

「（仕方ないな）そう。俺は君と似てるんだよ。色々だね」

「おい！それは……………」

「これ以上は、駄目だ

知りたいなら、相応の覚悟をすることだね」

「……………」

実際はそんな物する必要さえない。でもこれではぐらかせるたるそして、俺の思惑通りエヴァはそれ以上追及することはなかった

「じゃあ色々ありがとね」

「もう行くのか？」

「うん。ちょっと魔法世界ムントウス・マギクスにね」

「今大戦中だぞ？」

「まあ色々あるんだよ」

「どちらかに付くのか？」

「ツケ！ゴ主人、コイツガ片方ニツイタラ確實ニモウ片方八瞬殺ダ  
ぜ」

「俺はどっちの側にも付く気は無いよ」

「じゃあ何故行く？」

「ねえねえ何のお話？」

鞆にせっせとお菓子を詰めていたミライがいつの間にかこちらに来ていた

「大人の話だよ」

「え〜でもエヴァちゃんとお人形さんは大人じゃないよね？」

「オイ！ゲツコー！コイツノ呼び方ナントカシロ！！」

「それは無理だと思っよ

で、エヴァさっきの答えだけど、俺がムンドゥス・マギウス魔法世界に行くのは別に戦争するためじゃない

守るためだ。人間を他の色んな種族達を守るためだから、まずは……」

戦争を止めさせる……！！」

「ハッ！貴様にそれが出来ると？たった一人で？」

「出来るさ。同じばけもの君になら分かるだろ？」

「まあな。だが人間どもには……」

「分かってるさ。でも、諦めるって訳にも行かないだろ？」

「ふっ、ばけものなのに、お人よしか  
ま、そういうのも有りか」

「でも、本当にありがとね。食糧もこんなに貰ったし、近くのゲートの場所まで教えてくれて」

「構わん。同じばけもの同士だろ？」

「はは。そうだな  
じゃあまた何所かで会えたら」

「ああ。会ったしたら次は何所になるだろうな？」

「もしかしたら、意外なところかもよ？」

「具体的には？」

「学校、とか？」

「はっ、あり得んな」

「そうかな？」

「制服とか似合いそうだけど」

「それなら、自分で作っている」

「へえ〜。じゃあ俺らもそろそろ行くよ」

「ミライ行くぞ」

「うん！またね、エヴァちゃん！！」

「ふっ、ああ」

俺達はどうしてエヴァ達の下から旅に出た

「ねえねえゲッコーこれから何所に行くの？」

エヴァの家から貰ってきたお菓子を頬張りながら聞いてくる

「魔法の世界だよ。ミライ」

「へえ！！じゃあミライもまほう使える？」

「ああ。きつとな」

「じゃあじゃあ今から杖買いに行かなきゃ！！」

「そうだな。でも先にゲートに行こう。それからだよ」

「うん！げーと、げーと、げーと、げーと」

「ああ。さあ行こう！ウエールズへ！！」



4話 かくれんぼと鬼ごっこ、それから魔法世界（前書き）

タイトル長くてすみません

#### 4話 かくれんぼと鬼ごっこ、それから魔法世界

まずいことになった

それも、相当

ふと、隣を見る

「　　」

隣ではいつもと同じようにミライがお菓子を嬉しそうに頬張っている  
一日一っつていう約束したはずなんだけどな

ちなみに、今の服装は宮坂高校の冬服、俺は男子なので、当然ミライは女子のだ。神が気を利かせて、置いてくれたようで、それを着ているわけだが

「……………」

「ねえねえゲッコー。私たちすっごい、みんなから見られてる気がするんだけど」

「き、気のせいじゃないかな？」

「そうなの…かな？」

ん〜そっか！そっだよね！」

そう言っつて、先ほどと同じようにお菓子を食べ始める

そして、先ほど言っつていたことだが、全然気のせいなどではない  
月曜日、時刻は午前十時。学校ならとうに始まっているだろう時間だ  
そして、イギリスは日本と同じく、学校の制服がある国なのだが、

やはり、日本とイギリスでは服の特徴とか色々変わってくるわけで、更に言えば道を堂々と日本語で話しながら歩いている

そう言った点で、俺達には道を歩いている人々の視線がこれでもかと言つくらいに突き刺さる

だが、そんなことはほとんどどうだって良い

別に気にするようなことではない

そう気にすることではないのだ

だが、それによって生じる問題は見過ごせない

実に簡単なことだ

「（ゲートが開かれるのは今日の正午きっかりだぞ！？大体、ここからウェールズまで行くには最低でも五時間は掛かる。もう時間が）

」

そう。時間だ

能力とかを使えば、後三十分掛かるか掛からないかで着くような距離なのだが、生憎ここは商店街のようで、人通りも多い。路地で能力を使おうにも、ウェールズに行くには最終的にここを通らなくてはならない。さらに周りの人の目を引くような服装の俺らは能力が使えないわけで

「（どうにか、ここに居る奴らの注意を引け付けられればなあ）」

そんな時、見えたのは火災報知器

「（人為的に火災なんて起こしたら、もつとまずいことになるしなあ。自分で押そうにも周りが見てるし）はあ……………」

そう言つて、顔を落とすと今度はミライの頭が見えた  
未だにお菓子食べている彼女はこつちを振り向いて「どうしたの  
？」と聞いてきたが、俺にその言葉は届かない  
なぜなら

「あつた！」

周りの通行客が一齐にこちらを向く

「ど、どうしたの!？」

ミライが驚いた表情こつちを見る

そのミライの耳元で、俺はミライにだけに聞こえる音量で

「ミライ」

「なに？」

「ミライの電気をあそこの赤い箱に流せる？」

「出来るけど、それじゃあ封印を……………」

「解くよ。けどここじゃ駄目だ」

「分かった」

そして、俺は近くの路地に入り、ミライの手を取る

「じゃあ、行くね」





こうして、俺達は通常の人間じゃ確実に追いつけないようなスピードでウエールズへと続く道を進み始めた

「着いた――――」

「――！！！！！！！！」

「でも、もう1時半だし、急いでゲートを探さないと  
でないと、一週間飲まず食わずになっちゃうし」

すると、ミライはすごく申し訳なさそうな顔でこっちを見て

「……………ゲッコー、もしかして怒ってる？」

「へ？何が？」

「その……………ここまで来る途中で色々道草食っちゃって、ぎりぎりにな

ったこととか……」

そして、俯いて頭をこちらに向けてくる  
おそらく殴られるとでも思ってるのだろう

それに原作では人である月光に殴られていたが、ここでは化物の俺。  
原作とは違って力加減で悪魔でも痛いと思うだろう

だから、俺はちょうど俺の胸元くらいの高さにあるミライの頭を  
なでなで

「別に怒ってないよ

それにその時ちょうど俺も息抜きしたかったところだから、ちょ  
ど良かったんだよ」

「……じゃ、じゃあ許してくれるの？」

「怒るも何も端っから怒ってないって、それより早くゲートを探そ  
う」

「うん！」

そして、数分後

意外とすぐにゲートは見つかった

「で、ねえねえ月光」

「ん？どうしたの？」

「何で私たちこんなところに隠れてるの？」

もちろん隠れている理由としてはこの世界で身分証明となるのを持っていないからだし、そもそもこのゲートを利用することも言っていない。つまり俺達は密航者なんだ。と、いつても良かったが

「このゲートを使うにはね」

「うんうん」

「かくれんぼに勝ち残らなくちゃならないんだ」

「えーーーーー」「しーーーーー！」「う、ごめん」

「そして、あの真ん中にいる人達が鬼だ

あの人たちに見つかったらゲートを使わせてもらえない  
つまり……………」

「つまり……………？」

「俺達は一週間飲まず食わずになる……………！！」

「……………！！私、頑張る！！」

俺の言葉で一気に気合が高まるミライ  
意外と効果はあったみたいだ

俺たちが声を殺して、時が経つのを待っている  
そして、遂に12時になった

すると、辺りが一気に輝き始める

「ミライ、行くぞ」

「う、うん！」

俺は隠れていた場所から一気に飛び出して、集まっていた奴らに混ざる

こっち見て、何か騒いでいるがそんなのお構い無しだ

光があたりを包み込んで、光が収まると……………

「おーやっといついでおい、貴様らー!!」やばっ、ミライ今度は鬼ごっこだ」

「おう！絶対逃げるぞー!!」

こうして、俺達はまんまと魔法世界に進入することに成功した

「ってミライそっちは違っ……………」

「へ……………」

ミライが走っていく方向は出口とは真逆、魔法使いと思われる人物数名がミライを捕まえるために走ってきている

「っち！黒兎を……………（いや、駄目だ。ここにはたくさんのおれが、どうするかを必死に考えていると、向こうの方から

「うりゃー……」

そんな声とともに、魔法使い数人が宙を舞う姿が映った  
周りで見てる人も顔が引きつっている  
そして、当の本人がこっちに走ってきて

「ごめんゲッコー、タッチされちゃった……」

「あ、うん」

幾分か声のトーンを落として、喋りかけてくる

「タッチ！」

「へ？」

「へへへへへ。次はゲッコーが鬼」

「あ、うん」

そう言って、出口の方へ走っていく彼女を俺は追いかけるが、そ  
う受け答えするしかなかった

## 5話 黒ウサギと拳闘士（前書き）

すいません！！ずいぶん更新が遅くなってしまいました！！今週は遅れないように頑張ります！！

## 5話 黒ウサギと拳闘士

「ミライどこだぁー!!」

まるでゲームのように獣人たちが街中を歩いている町を13歳くらいの人間の子供がそんなこと叫びながら叫んでいる  
その大きな声とは裏腹に表情には何所か呆れすらうかがえる

「どこだぁ〜……………はぁ」

と、いうのもここ魔法世界ムンドゥスマギクスに来て、二日しか経っていないが、これで迷子はもう五回目になる。いつもは大概道の真ん中でお腹が減ってぶっ倒れている

それに、俺達は先の一件で指名手配中  
エヴァから貰った薬で年齢を誤魔化しているので、大丈夫だと思  
うが、何があるか分からない  
のだが……………

「（おかしいな。迷子になってもう四時間。いつもならもうぶっ倒れてても良いような時間なのに……………）」

少し心配になってきたので、一応辺りの人に聞き込みを試してみよう  
と思い近くにいた獣人に声をかける

「すみません」

「ん？どうしたんだい坊や？」

「いえ、連れが迷子になったみたいなんで探しているんですが知り

ませんか？10歳くらいの小さい茶髪の女の子なんですけど」

「ああ、それなら」

「まさか、な……………」

目の前には今まで見てきた町の建物とは違いかなり綺麗な建物がある。この名前は『グラフィクス移民管理局』。自由交易都市グラフィクスにある施設なのだが、ここでは奴隷の管理もしていたりする（らしい）

早速、受付の人にミライのことを聞いてみると

「あゝそれなら正式に奴隷契約が結ばれていますよ」

案の定だった。借金の額は20万ドラクマ。この世界では二年は遊んで暮らせるような大金だ

「あの…ちなみにどこの奴隷に？」

「はい、それは……」

「ここか……」

移民管理局に聞いたミライが売られた店にまで来ていた  
見た目は普通のレストランのようだったので、一つの懸念は消えた

「（さて、ミライは……）」

ガシャーン

近くで皿の割れるような音が響き、そこに目を向ける  
すると……

「また、アンタかい！一体何枚割れば気が済むんだい！！」

「ううごめんなさい……………って、あー！！ゲッコー！！」

そう叫んでこちらに走ってくる若干八歳ほどの少女

「ミライ、こんなとこで何やってるんだ？」

「んとね……………はい！」

ポケットからごそごそと何かを取り出して、こちらに渡してくる  
それは、眼鏡だった

「（もしかして、これって認識阻害用の……………）これ、どうしたの？」

「え、えくと、変なローブ着てるおじさんに何してるの？って聞かれて鬼ごっこって言ったらこの眼鏡付ければ、絶対勝てる！って言うってね、それでね私ゲッコー喜ぶかなって思ってね、それで……………」

「買ったかったの？」

「……………うん」

想像通り、認識阻害の眼鏡を買わされ、奴隷商人に捕まったらしい  
当然ミライの呪いは解いては居ないので、逃げられもしなかったよ  
うだ

「はあく。分かった、ミライはこの人の言うこときちんと聞くんだよ？これ以上迷惑は掛けないように！」

「うん。それでゲッコー」

「ん?」

「怒ってないの?私、勝手に迷子になって、それで「確かに今回の少し見逃せないな」う……………」

「今回はこの程度で済んでよかったけど、もっと非道いところに売られちゃったりしたら、どうなってたことか……………」

「いめんなさい……………」

ポコンッ

可愛い音と共にミライの額の上ら辺に俺のチョップが炸裂した

「痛ッ」

「これからはこんな心配掛けるなよ

ミライは俺のたった一人の家族なんだから」

「うん!で、ゲッコーこれからどうするの?」

「ちょっとミライの解放ついでに、お金稼いでくるよ  
少しの間待っててね」

「分かった!」

「じゃあちょっと行ってくる(大幅に予定は変更するがあそこに行くか)」

場所は少しだけ移動する

俺は地球で言うところのコロッセオにも似た闘技場のような場所に来ている  
当然観客は居ないが

「はあ！？入団したいなあ？てめえみたいなガキが俺らの仕事出来るわけねえだろ！！」

「ガキかどうかは関係ない。強ければ良いんだろ？」

「は！ガキが俺らの世界なめてんじゃねえぞ！！まあ良い。座長は訓練士に勝てたら入団させてやるって言ってるしな。言っとくが俺らの兄貴は強えぞ？」

「そんなの関係ない。さっさと入団させる  
金が必要なんだ」

「まあガキに勝って言うのはさすがにきついだろうから三分持てば許してやるよ。まあお前なら十秒も持たねえだろっがな！」

聞く気もなくなってきたので、対戦相手を待っていると思のほうから俺の軽く三倍はあるつかと言つ巨体の男が出てくる

「はあ？おい、こいつが入団希望者か？」

「はい！そうです兄貴！軽くひねり潰しちゃってくださいよー！」

そう言つて、構えも取らず、完全にこちらをなめきつた態度で

「おい！糞ガキ！どっころでもかかっ……」

ドガッ

次の言葉は出ない

というより、壁にめり込んでしまつていて下半身しか見えていない

「訓練士とやらは倒した。これで入団出来るんだろうな？」

「ひっ……」

こうして、俺は拳闘士としてデビューすることになった

「あの…服はどうされますか？」

「このままで良い」

「はい！分かりましたー！！」

「あの…その敬語止めてくれないかな？」

「はい！分かりましたー！！」

「はあ……………」

今日は俺にとってのデビュー戦なのだが、この通り周りの奴らのほとんども俺にビビりまくっている（まあ主な原因は俺が作ったわけなんだが）

逆によかったことと言えば、そのおかげというか何と云うか、ここに所属している拳闘士達は俺を怖れて、ミライにも手を出さなくなつた

それはさておき、このデビュー戦が決まるまでの数日間この世界の現状を俺は調べていた（さすがに大戦中に拳闘の大会は無いだろっし）

聞いたところによると、今は一旦停戦中らしい。だが、いつまた大戦が始まってもおかしくないのだとか。そして、アラレルラ紅き翼がまだ台頭していないところを見ると、グレートブリッジ奪還作戦なども未だ

に起こっていないようで、本格的な『大分裂戦争』が始まるのはまだ先のようにだ

「（『コズモエンテレケイア完全なる世界』かそこらへんの情報収集も始めとかないと……）」

と、その時

「あの………」

「ん？」

「そろそろ、時間なんです………」

「ああ」

そうして、奥に見える光に向かって、ゆっくりと歩き始めた

ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

会場に入ったとき耳を塞ぎたいくらいの大歓声が辺りに響き渡る

そして、俺と敵方の紹介が始まる

会場からは驚きや冷やかしかしや野次と言った物が自由に飛び交う  
まあ俺の見た目は13歳の人間だし、それは尤もなことだと言える  
だろう

だから、気にしない。いや、もとよりそんなもの俺の耳に届きもし

ない

「インキビテ  
開始!」

そして、場内に試合終了の合図が響き渡る

一瞬。もとより会場を盛り上げるつもりは無い。いや、拳闘士となつた以上盛り上げなければならないのかもしれないが、それは今日じゃなくても良い

そして、残つたのは会場中央に悠然と立つ。俺と壁に打ち付けられ、完全にのびている名前も憶えていない（憶える気が無い）拳闘士二人の姿だった

6話 強き物と強き者（前書き）

もうすぐ『大分裂戦争』です

## 6話 強き物と強き者

ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

一瞬の静寂の後、場内が一気に歓声に包まれる  
今まで野次を飛ばしていた奴らも口々に歓声に加わっていく

「あの、勝利者インタビューを……………」

その歓声を尻目に会場を出て行こうとするが、司会者だろうと思われる人物に呼び止められる

「ああ、すみません。うっかりしてました(ニコッ)」

「い、いえ。そんなことは……………／／／／」

この前、怖がられてから周りの人には出来るだけ優しくするよう心掛けてきたのだが、何か間違ってる気がするのは気のせいか？

「そ、それでお名前は？」

「月光、鉄月光です」

「で、ではゲッコーさん！！ちなみに好きな女性のタイプは！？」

「はい？」

何故いきなりそんな質問に？

「す、すみません……い、以上勝者クロガネ・ゲツコー様でした  
—————!!」

俺の名前の後に『様』が付いていたのは気のせいかな？  
それは一旦置いといて、俺は会場の外へと繋がる道へ来るときとは  
違って少し足早に歩いていった

「ゲツコーのど濁いた〜」

「はいはい。それより、店の方は良いの？」

「別にいいよ、アンタまたサボってんのかい!!早くこっちに来な  
!!」「う〜」

ミライが奴隷長に連行されていくのを横目で見ながら、ミライのた  
めに用意したオレンジジュースを一口飲む。程よい酸味と甘さが体  
に染み渡ってきて、どうにも心が安らぐ

だけど、感傷に浸っている暇は無い。この世界では後どれくらい後

かは分からないが、戦争が起きる。たくさんの人が亡くなり、多くの悲しみが世界を包む

止めなきゃならない

俺には死んでしまう悲しみは分からないけれど、ミライの言っていたように誰かがいなくなるというのはその人のことを想っている人にとっては辛いことだろう

俺だってそんなこと絶対させないが、ミライが死んだら、多分だけど、この世界を壊してしまう

「甘いな……………」

そう呟いて、俺はまた一口オレンジジュースを啜った

「壊れる」

ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

「またまた勝利!!!クログネ選手!!!破竹の勢いでベテラン二人を倒し、40連勝です!!!てか連絡先教えてください!!!」

大分慣れてきた声援と、興奮気味の司会者の演説を聞き流し、この二ヶ月ですっかり歩きなれた道を歩いていく。この二ヶ月でミライの借金分である。20万ドラクマは全て稼ぎ終えている。それでも何故俺が拳闘士という職業を続けている理由は今までとあいつも変わらず、『金』だ。もうエヴァからの食糧は当の昔に尽きてしまっているし、ミライのおっちょこちょいを支払うのも馬鹿にならない。店の人はいいといってくれるが、それに甘えるわけにもいかないそれに、ミライも店の人達に懐いて、まだ働きたいとも言っている

「あ、おかえり。ゲッコー」

そうしている間にも、レストランに着いてしまっていたようで、ミライが小走りで近づいてくる

「ただいま、ミライ」

そうやって、この二ヶ月で癖になりつつある挨拶をかわした後、一人レストランのテーブルに着き、ミライに持ってきてもらったコーヒーを口に流し込む

そして、前から集めてきた情報を頭の中で整理し始める

ヘラス帝国とメセンブリーナ連合とは今のところ、表面上はと言う形を取っているものの、もういつ『大分裂戦争』が起こってもおかしくない。俺の予想では後三ヶ月、この間にはまず間違いなく起こるといつて良い

次に、『コスモエンテレイア完全なる世界』についてだ。これも前の話に関わってくるが、こっちは今のところ有力な情報は何一つ見つかっていない。まあ国家のトップが関わっている状況だから、そう簡単に手に入るとも思っていないが、残りはあくまで、俺の推測だがあと三ヶ月あ

るかないかで何か一つでも情報を手に入れないと

「くそっ……………」

悪態をつきながら、俺は残りのコーヒを一気に飲み干した

その時、視界の端から誰かが近づいてくるのが見えた

それは俺の所属する拳闘団の人だった

いつも俺の試合日程などがあれば伝えにくるのだが、まあいわゆる俺のマネージャーみたいな人で、名前はラウル・サイファーさん。俺はラウルさんと呼んでいる

「うつつす」

この二ヶ月で俺への恐怖も少しは薄れてきてくれたようで、ほとんどの人はこんな感じに対応してくれる  
それはさて置き、本題に入る

「明日って試合ありましたっけ？」

「前言った拳闘大会だよ」

「ああ、そういえば。そんなこと言ってましたっけ」

「ちゃんと聞いとけよ」

「すみません」

「で、明日だが参加するか？」

「はい、一応」

「分かった。じゃあまた明日」

「はい」

軽く挨拶して、ラウさんは去っていき、また俺一人になる

まだ、遅くまで飲んでいるような客が居るので、静かと言うわけではないが

もう寝ようかと思って、飲み干したコーヒーのカップを片付けるためにコーヒーカップに手を伸ばそうとする

しかし、その手はコーヒーカップに届く直前で止まる

「……………（誰だ？）」

おそらく化物になった影響だろうが、人から向けられる視線や色々な物を敏感に感じ取ることが出来るようになった。そして、その第六感とも言える感覚がある特別な視線を捕らえた

まるで人を観察するような、何かを伺うような視線  
そちらの方向へ振り向くと、街の通りが見える

このレストランは高台にあるので、必然的に見下ろす体制になる  
だが、見下ろしてみても、いつものように大騒ぎしているだけで、  
それらしい視線はもう消えてしまっていた

「……………寝るか」

俺はテーブルのコーヒーカップを片手にレストランの奥へと帰って  
いった

そして、次の日…拳闘大会の日だ  
だがしかし、俺の朝は昨日までと全く変わらない  
起きて、顔を洗って、歯を磨いて、そして……

「ミライ起きろ〜

もう朝だぞ〜」

「ん〜あと五分〜」

「それを信じて待ったら、前一日中寝ちゃったの忘れたのか？」

「ん〜」

そう言って眠そうに顔を上げる

「おはよーゲツk……………ZZZZZZ」

「こら！もう寝ちゃ駄目だよ」

「ん、おはよーゲツコー」

「おはよーじ、ミライ」



最近妙に女性からの声援が多くなっている気がするのはどうしてだろう？

そして、向こう方の紹介が始まる

大会に出てくるほどなので、相手もそれなりの実力者のようだ  
その時……………

「ん？（またこの視線、今度は観客席か？）」

観客席の方を見る。しかし、昨日と同様にまた視線は消える

「インキヒテ  
開始！」

「（一体誰が？俺に何の用があるんだ？）」

「おい、てめえ！！注目のルーキーだかなんだか知らんが、無視してんじゃねえぞ！！」

「（まさか『コスモエンテレケイア完全なる世界』か？いや、俺は今のところ特に行動は起こしていないはず。じゃあ一体？）なんにしても早急に見つけなきゃな」

「「「うらあ！！」」」

ドガッ

そして、俺の右ストレートと回し蹴りが相手方二人の顔面を捉える  
それだけで試合は終わる

ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

「試合終了！！クロガネ・ゲッコウ選手、瞬・殺です！！」

考えに耽りたかった俺は会場の歓声を背に場内から静かに去っていく

「おーゲッコウさっきは凄かったね」

「って！何でミライが居るんだ！？」

「ん〜何か知らないけど会場のお手伝いらしいよ」

「思いっきり把握してるじゃん。それよりこんなところまで、おしやべりしてて良いの？」

「えとね。今はアタシ、ひばんらしいよ」

非番と当番を間違っていないければ良いのだが

「おお！ゲッコウ二試合目始まるよー！！」

「うん、それじゃあ一緒に見…よ…う…う…う…」

「どしたの？」



6話 強き物と強き者（後書き）

ラカン登場！！

7話 覚悟の腫と堅き想い（前書き）

題は堅きと書いてつよきと読みます

## 7話 覚悟の瞳と堅き想い

「勝者！クロガネ・ゲッコー！！」

ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

俺は順調に二回戦、三回戦と勝ち進んでいっている

もちろんラカンも余裕で勝ち進んでいっている

そして、解説者が試合の終わった俺に話しかけてくる

「いやーさすが、ゲッコー選手

でも、先ほどの戦いは少しぎりぎりのようでしたが？」

解説者の台詞の通り、俺の服装は所々に傷が目立ち、額からは血が滲みでている

この怪我も俺は一瞬で治ってしまう。そういう身体なのだ

「はい、相手の方も相当の修行を積んでこられたようで、中々強かったのですが、何とか勝てました」

もちろん嘘だ。倒そうと思えば、解説者の始めの合図が言い終わる前にでも倒すことが出来る

だが、ラカンのように始まった瞬間に倒しても、最初はすごいと思うかもしれないが、観客はいづれ飽きてくる。そう観客が見たいのは面白い試合なのだ

俺はお金が必要で、観客が面白いと思う試合をしなければならなかったとえ後でどれだけ罵られようと生きていくために必要なことなのだ

もうそこら辺の踏ん切りは当の昔につけてしまった

俺は今のラカンのように楽しむために闘っている訳ではない

- - -  
- - -  
- - -  
sideラカン

「いやーさすが、ゲッコー選手

でも、先ほどの戦いは少しぎりぎりのようでしたが？」

「はい、相手の方も相当の修行を積んでこられたようで、中々強かったのですが、何とか勝てました」

マイクを通して伝わってくる声が会場に響いてくる

ラカンほどの達人になら分かった。あの会場の中央で身体の色々なところから血を流しながら、それでも笑って解説者のインタビューに応えているアイツが全く本気を出していないことくらい

まあ、言っちゃあ何だが、俺だって本気を出したことなんて、ここ最近では皆無と言って良い

だが奴は、それに加えて戦っている途中で自分自身で自分に傷をつけた。相手が攻撃してくる絶妙なタイミングを見計らって、自分の額、腕、足と傷を付けていった。おそらく直に戦った男も相手が自分で付けた傷だ何て全く思っていないだろう。今頃はもう少しで勝てたとか、悔しがっているに違いない

「おっと俺も次の試合だったな」

ようやく司会者が自分を呼ぶ声に気がつく

決勝までは後二回勝てば良い

「ふう〜」

軽く息を吐いて俺は闘技場へと入っていった

- - -  
- - -  
- - -  
side月光

「はあ〜毎度毎度、面倒くさい」

自分の腕や足を確認する。そこには、傷どころか服すらも破れておらず元の状態に戻っている  
これこそ俺の能力の一つだ。十五分に七回死なない限り、それまで受けた傷は服なども含め全て回復する。だが公衆の面前で傷が元に戻っていったらさすがにおかしいので、毎度毎度もう一つの全てを封じる能力で再生能力を抑えている

「ん〜とミライは……………」

「さっきサボってた分しっかり働いてもらっからね」

「う〜分かった」

「……………暇だな」

会場では現在三回戦が行われている  
俺の番が回ってくるのはまだ少し先だ  
このまま勝ち進んでいくと、決勝でラカンと当たることになる

「(どっちにしよう。次くらいで負けとくか?)」

そんなことを考えている中、当の本人であるジャック・ラカンが三回戦を突破し、司会者のインタビューを受けていた

「いやーさすがラカン選手。圧倒的でしたね」

「ん。おお！相手の奴も中々だったが、ま、相手が悪かったな！」

そして、インタビューの中、ふと、話題が変わって

「……………それにしても、今のまま行くと決勝で当たると思われるルキー、クロガネ・ゲッコ選手についてはどう思われますか？」

まるで、この話題を待っていたかのようにラカンの目が光った(気がした)

そして、観客席で眺めている俺を意識するように

「そうだな。新人にしちゃあ中々出来そうな奴だったし、出来れば決勝まで来て戦ってみてえよな」

「ほお！これは早くもラカン選手よりの勝負宣言です！さて、これからどうなるのでしょうか!？」

「(ここの言われちゃあ(戦わないわけには行かないよな

ミライ！)」

「へ？ゲッコーなんこつちビールっつ」は、はいー!」

ミライは手が空いていないようだ

「(ま、一人でも相手くらい出来るが、そうになると『黒兎』が必要になる可能性がある。正直あれは見せたくない) まあ、『凶剣』<sup>スベル・エラー</sup>で十分かもしれないが」

「何が十分だつて？」

「いえ、俺の相手なんてラカンさんじゃなくても十分じゃないのかな？つて思っただけですよ

ね、ラカンさん」

いつの間にか俺の隣には会場に居た筈のラカンさんが立っていた

「おーっと！早くも観客席で二人が火花を散らしております」

司会者がまた煽るようなことを言つて場内が歓声に包まれる

「てかお前いつもその腰に差してる刀何よ？聞いた話じゃ使つたこと無いつて聞いているぜ」

「それは決勝でのお楽しみ、ということぞ」

「ははは、中々粋の良いガキじゃねえか。じゃあ決勝で会おうぜ」

「はい。では俺はこれで」

「あん？お前何かあんのか？」

「次、俺の試合つすよ」



「俺には俺の何が面白いのは分かりかねますが、決勝で闘えることを祈っていますよ」

「言われなくても行つてやるよ」

「楽しみに待っていますよ」

「ってゲッコー選手！？何所行つたんですかー」

行かなくて良いのかよ！と言おうと思つたが、言う前に既に奴はどこかに消えてしまつていた

そして、時は進む

準々決勝、準決勝も二人とも十秒と掛けずに瞬殺

そして、残るは決勝のみ、時刻は既に午後八時になろうかというところ

そんな中何所にそんな元気があるのだろうか？というくらい元気な司会者から決勝の対戦カードが告げられる

「さあさあやーーーーー  
つと来ました！！

グラニクス拳闘大会もいよいよ大詰め！！残すはあと一試合！！  
会場ももう待ちきれないようなので、早速対戦カードの発表です

！！

まずは西側！自由を掴んだ最強の奴隷拳闘士！！

今大会今までに闘った相手を倒すのに掛かった時間は五分を切っています!!

さあ登場してもらいましょう

ジャック・ラカン選手!!!!

ゆっくりとファンに手を振りながら、会場中央に出て行く

「さあて東側は、何と!!拳闘士となつたのは僅か二ヶ月前!!

拳闘界に颯爽と現れた若干13歳の若き拳闘士!!

今までの戦績は47勝0敗!!

こちらも登場してもらいましょう

クロガネ・ゲッコ―選手!!!!

その黒き双眸は自分に確かな『力』を感じさせるには十分すぎる覚悟を備えていた

7話 覚悟の瞳と堅き想い（後書き）

本当にすいません！！次回はVSラカンになりますんで・・・

## 8話 黒きウサギと筋肉ダルマ

「やっぱり来やがったな」

「そうですね」

こっちは無駄にコイツが会場を盛り上げたせいで、途中で負けるに負けられず最終的に決勝の舞台にまで来てしまった

「何故俺のような子供にわざわざ勝負なんてしようと思ったんです？」

「何でってそりゃあ強そうだからに決まってるだろ？」

「は？」

質問を質問で返された上に予想だにしない答に驚いた

いや、原作の知識がある俺はこのジャック・ラカンという男がこういう男だと言うことは分かっていたはずだ。でも理解できなかった俺には過去の思い出が無い。あるのはこの世界じゃ使えるのかどうかすら危うい数学とかの知識とこの世界『魔法先生ネギま！』と『いつか天魔の黒ウサギ』の知識とミライだけだ

さっきは形式的に『楽しみに待っている』とは言ったが、俺にとつての戦いとは、家族であるミライを守るための幸せにするための一種の手段に過ぎない

だからこの男のように己の快樂のために闘うということがどうしても理解できなかった

「じゃあお前は何のために闘ってるんだ？自分のためじゃねえのか

「？」

「俺は家族に……ミライに幸せになってもらいたいです  
アイツは良くドジ踏むから、ここに来たのもアイツが間違っ  
て、借金作っちゃったからです」

「その何所が自分のためじゃないって言えるんだ？」

「どっついうことですか？」

「闘って倒して、それによって誰かを幸せにしたいってことだろ？  
そっついうのは誰かが幸せになることで、自分も幸せになるからや  
ってるっただけだ」

「まあそっついう見方も出来ますか」

「……でも、今の俺たちには関係のないことですよ？」

「ああ、もっともだ」

俺にはまだ自分の闘う意味とかそんなことは良く分からない  
ミライを守りたい。確かにそれはある  
『でも、それだけなのか？』その問に対する答えはまだ俺の中には  
無い

インキビテ  
「開始！」

ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

会場の声援が一気に強まる  
それが俺に対するものなのか、それとも向かいに立っている男なのか  
それは分からないが

「来ねえならこっちから行くぞ！」

持っていた俺の二倍はありそうな大きさの剣を2本こちらに投擲し  
てくる

それに対する回避行動は取らない。取る必要が無い  
たった一言、右手を前に翳して

「壊れる」

唯それだけ

右手の周囲が歪み、飛んできた剣の一切を壊していく

「うお！それが巷で噂の破壊の手とか言う奴か！？」  
（ハンドオブデストラクション）

「……………何ですか、それ？」

「ん？お前知らなかったのか？結構有名だぞ」

俺の知らない間にそんな変な名前がこの能力についていようとは夢  
にも思わなかった

確かに、拳闘士になってからは凶剣（スベル・エー）も使っていないし

「……………ま、俺からしたらその腰にぶら下げてる  
刀の方がよっぽど気になるがな」

「そうですか」

それより、貴方の実力もこの程度ではないでしょ？」

「まあな、俺は素手のが強えし」

まあ準備体操もこれくらいにして……そろそろ行くか」

今までとは違い構えを取っているところからラカンが本気なのが見て取れた

「（さて俺はどうしようかな？）」

「来ねえならこっちから行くぞ！！」

向こう側に立つラカンから気が大量に練りこまれた右ストレートが放たれる

俺は上空に飛んでそれをかわす

ドガンッ

「（気が……：そういえばこの世界のものは今まで試したこと無かったな

今度、魔法でも勉強しようかな？）」

「オラッ！！」

またもや考え中に次なる拳が飛んでくる

回避しようとするが宙に居て回避行動を取れない  
それに凶剣スヘル・エラーもまだ温存しておきたい

と、いうわけで俺は右手を前に出す

だが

「（あゝでもこれ以上巷で変な名前とか付くの嫌だなゝ）」

ドガンッ

何のアクションも取らなかつた俺はあっけなく一回死んだ  
身体の骨は全て折れているだろう

ピクリとも動かない

でも、神経もやられているようで、痛みも感じない

そして、昔…といつても、ほんの二ヶ月ちょっと前の話だ

悲しそうな顔をしながら、「死」について言ってくれた少女の顔を  
思い出す

「ミライ、やっぱり俺に『死』の悲しみはまだ理解できないみたい  
だ」

- - -  
- - -  
- - -  
sideラカン

ドガンッ

「おいおいこの程度……なわけねえよな」

しかし、現に自分の右ストレートが奴を完全に捕らえていた  
その証拠に身体の衣服はボロボロ腕や足は変な方向に曲がっていた

「す、凄まじい一撃……！」



ど真ん中で涼しげな表情で立っている奴に驚きを隠せなかった

「いつまでそこに居る気ですか？試合はまだ終わっていませんよ」

「てめえ何した？」

「俺ですか？俺は何もしていません」

「はあ！？何もしてねえのに、何で傷が治るんだよ！」

「そういう体質なんです」

「どんな体質だよ！（何かカラクリがあるはずだ。幻術？いや、そういう感じはしなかった。じゃあ何だ？）」

色々考えてみるが一向に何も思いつかない

「あー面倒くせえ！！もう止めだ止めだ

元々俺はそういう難しいこと考えるの苦手なんだよ！」

「終わりましたか？」

「ああ。終わった

どんなカラクリかはしらねえが全力でぶっ潰す！！」

.....

Side月光

「どんなカラクリかはしらねえが全力でぶっ潰す!!」

「（カラクリも何ももう答え言っちゃってるし）」

これこそいつ天主人公、鉄大兎の能力

俺は十五分間に七回殺されない限り絶対に死なない

しかも、その間に受けた傷も全て回復する

今殺されたので、後、五回は死ねる

いや、もう関係ないか

「これ以上死ぬつもりもないし」

先ほどは極限にまで抑えていた『黒兎』の力をほんの少し解放する

「さて、貴方には謝らなければならぬかもしれないかもしれませんがね」

「は？何でだ？」

「楽しい時間ももう終わりということですよ

お望みどおり俺の力のほんの一部を貴方にお見せしましょう」

「……………今までののは全然本気じゃなかったと？」

「まあそうですね」

「はっ！面白れえ掛かって来い……………!!」

「では……………」

一旦目を閉じ、開く

すると、その瞳は真っ黒に染まる

ガッ

まずは瞬動でラカンの懐まで移動する  
当然ラカンは反応して拳を放ってくる  
が

「衝撃を消せ、凶剣」  
スベル・エラー

「……………!!」

左手で逆手に持っていた黒い刀に当たって止まる

ドガッ

そして、そのままアッパーの容量でラカンの身体を上空に打ち上げる  
さらにそれを追うようにして瞬動でラカンの居る場所まで上がる  
そして、黒く染まった指をラカンに向ける  
その指の中央には魔術『黒』が浮かんでいる

「これで終りだ

……………拒絶する」

指先の魔術が解き放たれる

ドガンツツツツッ!!

ラカンの身体は無残に会場の地面に叩きつけられている  
おそらくもう動けはしないだろう



「…………ふっ。じゃあその心意気に敬意を表して、次の一撃で終わらせてあげましよう」

再度瞳が黒く染まり、右腕全てが黒く染まり、『黒』の魔術が浮かび上がる

ラカンも今出来る全ての気をその拳に込める

「拒絶する」「ラカン・インパクト……!!」

8話 黒きウサギと筋肉ダルマ(後書き)

もうすぐ大分裂戦争!!

9話 開戦とSign(前書き)

ようやく大分裂戦争！





のかな?)「お、おかえりゲッコー……………」どしたの?それ?」

ミライの声のするほうへ顔を向けると、確かに居る  
居ることは声で分かるが、見えない  
というより、膨大な量の何かを持たされていて、それしか見えてい  
ない

「実は……………」

「ミライ、それマジ?」

「うん、ほんとだって」

「はあ」

ミライの話によると、これは全てサイン色紙らしい  
しかもミライの持っているものだけではなく、後ろに5、6個積ん  
であつたダンボールの箱の中も全てそうらしい  
何でも、会場で働いているときにミライが俺と知り合いだとい  
うことがばれていたらしく、俺のファンクラブ会員だとい  
う人たちにこの色紙を渡されたらしい

「それにしてもこの量は異常じゃないか？まずこんな人数会場に入りきらないぞ」

「え〜とね、ほぞんようと、かんしょうようと、しょうよつの三つ書いて欲しいって一人三つずつ渡されたんだよ」

「……………保存用と観賞用はまだ何となく理解は出来るが使用用って何だ！？一体何に使うつもりなんだ！？」

俺の見た目年齢は13歳だぞ！？原作知識からもそうだが、この世界にはしょたこんしか居ないのか？

「で、ゲッコーこれどうするの？」

「どっせすることも無いし、書いておくよ」

今日は眠れない夜になりそうだ

「ふあ〜…まだこんなにあるのか」

時刻はちょうど日付の変わった午前0時、俺は今も尚コーヒーを片手にサインを書き続けていた  
大体今のところ3分の2辺りまで終わったところだ  
それでもまだ積み上げられているダンボール箱を見ると、どうも終わりが感じられなくなってくる

「（一旦、気分転換でもしてみるか）」

軽く気分転換のつもりで、店の屋外にあるテーブルに一人座ってコーヒーでも飲んでみようか？と思った矢先どうにも通りで慌しく人の移動するさまが見えた  
いつものような馬鹿騒ぎと言つのではなく、口々に話し合っている、その中には不安そうな顔の者、逆に安心しているような顔

「一体何が……………」

「おーアンタ、ここにいたのかい？」

「ああ。奴隷長<sup>チーフ</sup>一体これは何の騒ぎですか？」

「アンタ知らないのかい!？」

「はい。帰ってきてからずっと部屋にいたもので」

「実は……………」

「（予想はしていたが、まさかこれほどまでに早いとは………  
情報はほぼ皆無）くそっ！」

可能な限り早足で未来の眠っている部屋の前までやって来る  
いつもなら

ここでノックするが今はそんな場合ではない

バンッ

「ミライ入るぞ」

「ん〜後5分〜」

「そんなこと言ってる場合じゃない  
早く起きてくれ!!」

「ん〜分かったあ」

目をこすり未だに眠たそうにしながら起き上がって、こちらの方に  
向き直る

「…で、どうしたの？」

「戦争だ」

「で、戦争ってゲッコーどういうこと？」

今俺達は急いで今まで溜めてきたお金やら何やらをバックの中に詰め込んでいる

そんな中、手は休めずにミライが俺に尋ねる

「そのままだよ。今日俺たちが帰ってきてすぐ突然ヘラス帝国側から宣戦布告があったらしい

両軍がぶつかるのは大体明日の夕暮れから明後日の昼ごろまでにぶつかる可能性がある

ここはメセンブリーナでもヘラスでも無いから直接的な戦場になることは無いだろうけどな」

「良かったあ」

心底安心そうな顔をする

「ミライ、俺達がここに来た理由憶えてるよな？」

「えー？う、うん！お、憶えてるよー！」

「……………忘れたの？」

「ごめんなさい……………」

「俺達は戦争を止めに来たんだろ？」

「あ、そうだった！」

「はあ……………で、だ。ここからヘラスとメセンブリーナの国境までは相当な距離がある

急ぎここから移動する必要があるんだ」

「じゃあこの人達とはお別れか……………」

「ごめんな」

「良いよ。別にゲツコーは悪くないもん」

「でも、時間的にも後一時間以内には出ておきたい  
お世話になった人達にお別れを言っておきなよ」

「うん……………」

「おいおい、本気か？」

「はい。俺とミライはこれからメセンブリーナに向かいます  
この二ヶ月ラウさん達には本当に感謝しています」

「別に良いって。おかげでこっちも稼がせてもらってるんだから」

「では俺はこれで」

「おう！元気だな！

あ！」

「どうかしましたか？」

ラウさんは何所からかサイン色紙を取り出し、こっちに渡してくる

「いや、サイン書いて欲しくてな」

「それは別に良いですが、何ですか？」

「いや、お前が英雄になったらこのサインも高値で売れるかもしれないだろ？」

「じゃあ頑張つて英雄にならないとですね」

「おう！英雄になって絶対帰って来い！」

「はい！」

ラウさんの激励に押され、俺はミライと合流する予定になっている  
地点に歩を進めた

「星が綺麗だ」

見上げた空には雲は無く、星が瞬いている  
誰もこれが“幻”だとは思っていないのだろう

「でも、今ここで起こっていることは紛れも無い現実なんだ  
ラウさんも奴隷長<sup>チーフ</sup>、彼らが居たことは絶対に現実なんだ  
『コスモエンテレケイア完全なる世界』か何だか知らないが誰も消させやしない  
彼らを“幻”にはさせない！」

「ミライ、お別れは済ませたか？」

「うん！」

さっきまでとは打って変わって元気に挨拶する

「ゲッコー」

「ん？」

「アタシ絶対帰ってくる」

「ああ」

「生きて、絶対帰ってくる」

「……………さあ行こう。戦争を止めに」

大丈夫だミライ。君は俺が守る絶対生きて帰させてみせる  
どれだけ犠牲が出ようと、君だけは……………

10話 人形と世界を殺す毒(前書き)

長らく更新が止まっています！中々良い案が思い浮かばなくて………(言い訳)まあ一応最新話です！

## 10話 人形と世界を殺す毒

「遅かったか……………」

俺の目の前では様々な魔法が飛び交い、両軍の魔法使い達が次々と倒れ、それを医療専門の魔法使いが治す。しかし、それを嘲笑うかのように更に多くの怪我人が運び込まれていく

「……………いくらなんでも早すぎるだろ」

確かに、途中でミライが俺の分の食糧を忘れてきたり、砂漠の途中で立ち寄ったオアシスで勢いで溺れたりと色々なハプニングがあったものの、俺たちの足の速さは人間何ぞとは比べ物にならないわけで、最終的に着いたのは、時刻にして今は11時半頃。宣戦布告してまだ半日程度しか経っていない。幾ら予想していたとはいえ、対応が早すぎる

「やっぱり完全なる世界が関係してるのか」  
コスモエンテレケイア

まあ当然のことといえば当然のことだ

奴らは国のトップも関係しているわけで、そうなると世界を滅ぼそうと各国を操作している奴らなら開戦の日程くらい事前に伝えて、前もって準備が出来る

でも、今はそんなこと関係ない。この戦争を如何に止めるかが大切だ当初の予定では、両軍がぶつかる前に間にでかいのを一発ぶち込む予定だったが、既にぶつかっている以上この案は使えない

「さて、どうするk」君に動いてもらっては困るな「……………」

突然後ろから掛けられた声にミライを庇うようにしながら振り向く  
そこに立つのは能面のように感情の無いような表情に真っ白の顔の  
青年。実際に見たことは無いが、記憶の中の映像が鮮明に蘇っていく

「<sup>プリムテム</sup>1番目か」

「へえ僕のことも知っていると、ますます放っては置けない  
な」

「ねえねえゲッコー、コイツ何？」

ミライも感じ取っているのだろう敵対の視線を<sup>プリムテム</sup>1番目に向けながら  
声だけで俺に聞いてきた

「……………敵だ」

「君は旧世界の人間らしいし、勧誘しようかとも思ったけど。その  
様子じゃあ、君は僕達と共に来る気は無いわけだね」

「ゲッコー、早く……………！」

「いや、ここは一旦退く」

両群がぶつかった以上こっちも策を考え直さなければならぬ

「僕がそう簡単に君達を帰すと思っているのかい？」

「ああ、帰すさ」

「お前は俺の前で何も出来ない」

「ふつ、ジャック・ラカンに勝っただけで天狗かい？  
確かに僕では君を殺すことは難しいかもしれないけれど、そっちの子はどうかな？」

「ミライに手を出すなら……お前を消す！」

右手に『黒』を集中させていく

「ゲッコー……」

「あのジャック・ラカンが手も足も出なかったと言うのは本当のよ  
うだね

「なんだいそれ？」

「………毒だ」

「毒？」

真っ黒に染まった右手を真っ黒に染まった瞳で見つめる  
そこに映るものに対して浮かぶこの感情が何なのか？俺にはまだ分  
からない。それを表現するような言葉が見当たらない。歓喜や悲哀、  
憎悪とも違う感情が生まれる

「そつ。世界を殺す毒

お前たちがミライやこの世界を壊そうって言うなら、その前に俺  
がこの力でお前たちを全員根絶やしにしてやる

戻るぞミライ。今日のところは出直すことにする」

「え、う、うん！」



「もぐもぐ、ゲッコー食べないの?」

「ん?ああ、食べるよ」

「でも早く食べないと、ご飯冷めちゃうよ」

俺達は戦線から離れ、近くで奇跡的にやっていた宿屋に身を置いて  
いる

「ああ」

「ゲッコー聞いてないでしょ?」

ムーっと顔を膨らませながら、詰め寄ってくるミライに一瞬面食らう

「(考えも煮詰まっていたとこだし、気分転換だな)じゃあ食べよ  
っか」

「うん!」

「でも、心なしか俺のご飯が少ない気がするのは何で?」

というか明らかにおかしい。メインのお肉は半分くらいに減ってい  
るし、多分、取りづらかったのだろう俺の方のテーブルにソースや  
らご飯やらが零れてしまっている

「へ!?そんなこと無いよそんなもんだったよ!  
うん。絶対そんなくらいだった!」

「ミ〜ライ〜イ〜」

「うっごめんささい」

「まあ、良いや

じゃあいただきます」

「ごちそうさまでした!」

食べ終わっていたらしいミライは元気よく手を合わせて、箸を置く  
そして、俺が食べ始めようとしたとき、宿屋の奥からこの人と思  
しき女性がこちらに向かってきた

「あんたらみたいな小さい兄妹がなんでこんな時期にここに来ちま  
ったんだい?」

「ん?ミライ達は兄妹じゃないよ」

まあ特筆して隠すべきことも無いので、別に大丈夫だろうと踏んで  
俺はまだ多少暖かいご飯に手をかける

「え、そうなのかい?じゃあ一体……もしかして、魔法使いとそ  
の従者かい?」

従者…か

「へ?じゅーしゃって何?」

「そりゃ従者って言うのは魔法使いの相棒みたいなもんじゃないか」

何を言っているんだと言いたげな表情でミライを見つめる女性  
まあ、今のこの世界じゃ俺らみたいな年でも戦争に参加したりする  
んだしな

ナギ・スプリングフィールドが良い例だ

俺たちもそれと似たような類だと思ったのだろう

「あいぼー……うん！私ゲッコーのあいぼーだよ」

もう、俺は何も言つまり

そう固く誓った。別に勘違いされたって構いやしないし、明日には  
この宿からだって離れるんだ

「それじゃあ、やっぱり戦争に参加するのかい？」

少し憂いにも似た表情を浮かべながら、悲しそうに聞いてくる  
が、それにミライは怒った表情で切り返す

「違うよ！ミライ達は、戦争を止めに来たんだよ！！」

「戦争を止めにつて、あんたら本気で言ってるのかい？」

あんたらみたいな子供にそんなことがd「本気です」「

ミライに向けられていた視線が今度は俺に向いてくる

「俺達はこの戦争をとめるためにここまで来た

別に笑っていただいても構いません。ですが、俺達は本気です  
俺達はどちらの陣営にも当然付く気はありません

「いくら頼まれようともね）……………）」

「……………気付いていらしたんですか」

「何となく…ですが」

まあ、さすがにどちらの陣営かは分かりませんでした」

「では話は早い。私はヘラス帝国の者です」

クロガネ・ゲッコー殿にお願いがあります。出来ればこちらの陣営に「断る。それに私ってそんなに大勢後ろにいるくせに」

それも気付かれていたんですか」

「何となくですけどね」

そろそろそろそろそろ

「へ？え？ちよ、ゲッコー！どういうこと？」

宿屋の奥からそろそろと鎧を着た帝国の兵士が次々と出てくる

そして、あつという間に俺たちの周りは帝国の兵士で埋め尽くされてしまった

「もう一度お願いします。どうか我らの陣営に「断る。何度も言わせるな」断られた場合は抹殺の許可もいただいております」

まあ、逆に連合に付かれりゃ面倒になるもんな  
でも、そんなあからさまに言わなくても

「それは脅しか？」

「私どももこのような方法を取りたくありません  
だからどうか「調子に乗んなよ」……………!!」

『黒』を目が黒く染まるくらいほんの少し発動させる  
それだけで、帝国の兵士は後ろへ後ずさる

「人間風情が。その程度の脅しに俺が屈すると思っているのか  
ミライ。残念だけど今日は野宿みたいだ」

「え〜。あ、じゃねおばちゃん」

ポンツと隊長と思しき女性にタッチして俺の後ろについてくるミライ  
俺が外へ出ようと扉に向かうと、恐怖のあまり動けないのか俺が通  
ろうとすると、そのまま倒れてしまった。この様子じゃちびってる  
奴いるんじゃない……あ、いた  
でも、まあそれにしても

「従者か〜」

「どつしたの、ゲッコ〜？」

「うづん。何でも」

10話 人形と世界を殺す毒（後書き）

次回は遂にアーティファクト登場！になると思います

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5684t/>

---

全てを忘れた黒ウサギ

2011年8月23日07時18分発行